

第四章 カルムイクにおける言語政策

- 4-1, 改革前の状況
- 4-2, 第一次キリル文字期 (1924~1930)
- 4-3, ラテン文字化期 (1930~1938)
- 4-4, 再度のキリル文字化(1938~)

本研究ではカルムイクにおいては20世紀初めから、この強制移住直前までの言語改革・言語政策の過程を詳細に検討する。

言語改革の最初の試みと思われるのが、1915年の改革トド文字案である。19世紀の終わりから、何度となくカルムイクの滅亡が話題に上るようになるが、民族としての生き残りには教育が不可欠であると考え、トド文字の正書法を口語に近づけた改革トド文字による文法書と教科書が1915年出版された。同様の文字で1917年の終わりから『オイラト報 (oiratyin zenggi)』も出版された。

一方で、ロシアへの同化がかなり進んだ地域であったドゥルベト出身のカルヴィンなどは、すでに革命当初からキリル文字化を唱えていた。

このような中で、正式に改革トド文字によるカルムイク語表記をやめ、キリル文字表記へと移そうと決められたのは、1924年1月6日に行われた文字に関する会議においてであった。さらに同年1月12日には「カルムイク文字改革委員会会議」においてカルムイク語の表記のために足りない6つの音素の文字表記が決まる。

1923年6月23日の母語教科書出版委員会会議決定では、教科書の表記として修正トド文字を使って行くことが決められており、この方針の転換はかなり急だったようである。

1925年5月14日の執行委員会幹部会決定を見ると、まだ改革トド文字が使われていた事実が示されており、使用を制限すべきであるという決定がなされている。

また、1925年11月モスクワにいるエレンツェンノフから届いたカルムイク自治州の中央執行委員会に手紙には、当時のアルファベットが書くのに不便であることを訴える内容が書かれていた。この手紙をきっかけに、1926年9月7日に再度、文字に関する会議が行われる。ここでは1924年に決まったカルムイク語用のロシア語にない音素を表す文字の変更がなされる。しかし、この変更を認めない人々の対立が起き、1927年1月にさらに会議が開かれて、変更が確認される。こうして、6月11日になってようやくカルムイク自治州中央執行委員会の決定が出る。

しかし、これでことは納まらず、最終的な決着を付けるためにさらなる会議をすることが同年11月に決定される。そして翌1928年2月5日から8日まで中央から当時のモンゴル学の権威であったウラジーミルツォフが招かれて行われた会議で、三度目のキリル文字によるアルファベット案が採用されるのである。しかし、この会議に参加したチュリャクロフは既にカルムイク語もラテン文字化すべきであるという意見を述べていた。

そして、全ソ連的な傾向に流されるように、カルムイクにおいてもラテン文字への移行が1930年1月7日に決定される。ラテン文字による出版は1930年の9月から始まった。

1931年1月にはモスクワにおいてモンゴル諸族文字・言語問題会議でのモンゴル語などで使われているc(ts)、ç(ch)の表記がカルムイク語のc(ch)、ç(ts)と反対であったために修正することが決められる。これを受けた同年5月17-20日エリスタで行われた第三回州言語・文字問題学

術会議では修正がなされた。

1934年5月10-14日に行われた第四回カルムイク言語建設会議では正書法と術語に関する問題が議論され、アルファベットの変更はなかった。

しかし、ラテン文字も長くは続かず、1937年12月30日に行われた共産党カルムイク州委員会ビュローで再度のキリル文字化が決定される。しかし、1941年1月15日に再度、アルファベットの変更が行われる。この変更は1941年2月19日 ロシア社会主義連邦共和国人民教育委員会令（第211号）で承認された。

同1942年、カルムイク自治共和国はドイツ軍に占領される。1943年解放されるもののその年の12月28日に自治共和国が解消され、カルムイク人はシベリアへと強制移住されていく。

4-1, 改革前の状況

20世紀まで

1648年、ザヤ・パンディタ(1599-1662)によって作られたトド文字は旧来のモンゴル文字を改良し、従来なら書き分けられなかった母音や子音などをはっきりと書き分け、サンスクリット語やチベット語からの借用をそのままの音で転写できるようにするために作られた文字であった。現在における解釈では、カルムイクの属するオイラト系モンゴル人たちの方言に向けた文字体系を作ったという解釈が主流であり、ザヤ・パンディタの伝記を著した内モンゴルのノロヴ教授は、彼が作成した文字によって書かれた言語はザヤ・パンディタの生まれたホショートのことばによく似ていると主張している。反対に、モンゴル国のロブサンバルダンがモンゴル全体の文字として考案されたものであり、従来、それまでのウイグル式モンゴル文字での書き方の名残りと解釈されてきたものは、実はハルハ方言を機軸に考えたために残されたものなのではないかと主張している。非常に興味を引く議論ではあるが、ここでは詳しく述べないで先に進むことにする。¹

時は下り、オイラト系の遊牧民族国家を形成していたジュンガル部が1758年に滅亡した後、女帝エカテリーナのキリスト教への改宗政策を嫌った多くのカルムイク人たちが1771年にヴォルガ河畔を去り、ジュンガル部があった天山山脈北部に去った。残った人々は、完全にロシアの支配下に掌握された。

カルムイク語の研究は19世紀前半にポポフや、スミルノフ、そして母親がブリヤート人であったボブロニコフなどによって辞書や、文法書などが出版されてかなり進んだ。既にこのころ、カルムイク語は、トド文字によって書かれたことばからはかなり遠いものとなっていたという。あるいは逆に、文字に残されたものであっても、口語に近づけられた表記が多く観察されている。その代表的なものがポーランド系のモンゴル学者コトヴィッツによって1896年の調査を元に1905年に出版された『カルムイクのなぞなど、ことわざ』である。

トド文字による正書法はザヤ・パンディタの時期には確立されたものがあり、その後の戦乱などにより失われ、書き方に違いが生じてきてしまったといわれる。とはいえ、この

時期に正書法のようなものがあったとしても、現在でいうような社会的な強制力はなかったであろう。確立した正書法がないことの不便を思い、トド文字表記の正書法の確立を志したゴルストゥンスキー、ポズドネーエフといったロシアの学者も現れた[Павлов(1975), 194]。

また、キリスト教の宣教師たちがカルムイクにも多く現れ、学校を作り、母語による教育を施したと言われるが、教科書などで使われた文字はキリル文字であったという[Нармаев, Очиров(1915), 1-2]。

つまり、カルムイクにおける 20 世紀以前の文字史ではブリヤートや他のロシア正教会の宣教師が入り活動したところ同様、キリル文字による表記が存在したということになる。

また、モンゴルにおいてラマ僧に向けて出された新聞（第二章参照）がモンゴル文字とチベット文字でモンゴル語を表記したように、個人的な覚え書きや、手紙のやりとりが、カルムイク人の間でチベット文字あるいはモンゴル文字で行われた可能性がないとは言えない。が、はたして、そのころの宗教活動などに関する一次資料が残されていない現状において果たしてどれだけのことが再構成できるかは非常に疑問であり、類推の域を出ない。

20 世紀初め

1850 年代に行われたコステンコフの調査に始まり、19 世紀の終わりから現在に至るまで、何度となくカルムイクの滅亡ということが多く話題に上っている。時代は前後するがこの話題に反応するかのように、革命時代初期には民族の復興というスローガンが多く用いられるようになる。こういった中、民族としての生き残りには教育が不可欠であると考え、トド文字を口語に近づけた形で文法書と教科書が 1915 年出版された。文法書はポーランド人カルムイク・モンゴル学者コトヴィッツの『カルムイク口語文法試案』であり、教科書はカルムイク人 Л・ナルマーエフとノムト・オチロフによる『読み書きの読本 (букварь)』であった。

この改革トド文字はその後、1917 年 11 月 15 日に創刊されたカルムイク人の手による初の新聞『オイラト報(oiradyin zenggi)』でも採用される。この新聞の第一号の最後には、新聞の出版のために資金援助をしてくれた人々の名前が挙げられているが、その中にペテログラード大学、後のレニングラード大学の教授であったウラジーミルツォフの名前が挙げられているのは非常に興味深い。彼は学生時代から何度か調査のためカルムイクに足を運んでいた。

また、他にも 1919 年から新聞やパンフレットが次々と出版されていた。『オイラト報』とは時間が若干ずれるが、この時期には『オラーン・ハリマク(赤いカルムイク)』という新聞も発行されていた。この内戦と第二次世界大戦などで多くの号は失われているが、キリル文字とトド文字の二つの文字によって書かれていたといわれる。

内戦期の1919年6月22日、レーニンは状況不利であった北カフカス地域にあったカルムイクに対し、ソヴィエト政権への支持を呼びかけ、代わりに自治を約束するアピールを發表する。これを根拠に、内戦が収束に向いつつあった1920年6月2日-9日、現在のカルムイク共和国のほぼ中央に位置するチルギルにおいてスタプロポリ、アストラハン、ロストフという三地域に別々に住んでいたカルムイク人たちが集まり、第一回の全カルムイク会議が開かれ、自治が採択される。この決定を受けて11月4日全連邦中央執行委員会とロシア社会主義連邦共和国人民委員会議の布告により、カルムイク自治州が作られることとなった。こうして自治をする領土がえられた後、カルムイク語の近代化の議論が自治州領内で始められていくことになる。

4-2, 第一次キリル文字期 (1924~1930)

改革直前の状況

1924年にキリル文字で表記することが決まるまで、改革の雰囲気はどのようなものだったのだろうか？残念ながら、どのような議論を人々が戦わせていたかを知るための資料はそう多くない。

例えば、1922年のロシア語で書かれた『オイラト報 (Ойратские известия)』誌の第3-4号合併号ではウソフという文献学者による「カルムイク語のロシア・アルファベット導入のために」という論文が發表されている。ここで彼は、リジ・カルヴィンがいずれの所かで發表した論文を叩き台に、果たしてカルムイク語はキリル文字化すべきかを論議したものである。ⁱⁱ

簡単にここでウソフが主張することをまとめるならば、カルヴィンが、主張するキリル文字での表記案に対し中途半端であると批判し、トド文字による表記を保持するか、改革するなら、思い切ってさらにヨーロッパ文明に近いラテン文字を採用すべきだというものであった。ⁱⁱⁱ

ここで叩き台となった、カルヴィンはロシアへの同化の進んだ地域であるドゥルベト・オルスで革命前から教師として働いており、革命が起こった直後からカルムイク人のことばのキリル文字化を主張していたようである。1928年に行われた「カルムイク語転写 (транскрипции)・正書法会議」でコシエフは、カルヴィンが革命直後からカルムイク語のキリル文字化を主張しており、それがキリル文字化の端緒であったと発言している。なお、このコシエフは、人民教育部の部長の職を長く勤め、1920年代から30年代に粛清されるまでカルムイクの言語政策に積極的に関わった人である。

このウソフの論文の後もトド文字は使われ続け、母語教科書出版委員会は1923年6月23日の会議において次のような決定を出している。

議題 (слушали) : 会議に提出されたカルムイク語の簡略 (トド文字) アルファベットと句読点に関する教科書出版委員会のメンバーであるボスハムジエフ同士の報告と簡略アルファベ

ットにおいて古いザヤ・パンディタのアルファベット（トド文字のこと）との関係を保つ必要性についてアルファベットの編成に参加するムジュエフ（メジュエフの間違い）とハグリシェフ同士による副報告

決定（постановили）：委員会のメンバーであるボスハムジエフ、ハグリシェフ、メジュエフ同士たちによって作成された新しい表現と句読点を備えたカルムイク語の簡略アルファベットを採用する。そのアルファベットは採択されることによっても自らの特徴を修正されず、また母語での文学の復興のために必要な旧来のアルファベットとの関係を縮小されることはない。

[P3/2/373/122]

ここでは、少なくとも、この 1923 年 6 月 23 日段階まではコトヴィッツ案の改革トド文字が簡略トド文字よばれ、この文字を使って教科書を作るつもりであったということがわかる。

なお、この会議にはコシエフ、ボスハムジエフ、ハグリシェフ、メジュエフ、トスタエフ、オンコロフ、バルバンツィコヴァ、コシエフ、それに先のキリル文字化の提案者であるカルヴィンが参加している。特にコシエフはこの母語教科書出版委員会会議の議長を務めている。

たぶんこの議論はくすぶりつつけていたのであろう、1923 年 12 月に言語会議の招集の呼びかけがあり、続く年の 1 月 6 日キリル文字を「転写(транскрипция)」として採用すること意図する会議が開かれるのである。[P112/1/33/25]

改革の始まり

改革トド文字によるカルムイク語表記をやめキリル文字表記への移行が正式に決められたのは 1924 年 1 月 6 日に行われた「文字（письменность）に関する会議」においてである。

この会議にはコシエフ、モシン、カルヴィン、コノヴァロフ、サイコフ、ハグリシェフ、メジュエフ、アルダシ・ボスハムジエフ、ケケエフ（原文では kekev）、ムニャノフ、トリシカエフ、労働者学部の学生、教育専門学校、ソヴィエト党学校の聴講生全 150 名の参加があり、主発表者としてノムト・オチロフ、副発表者としてカルヴィンが発表した。改革案は賛成 145、反対 5 で可決されたという。この会議の記事録によれば、20 人の質問者があり、文字を替えることに反対したのはボスハムジエフ一人で、他のものも異論はあったものの基本的に賛成であったと記録されている。

文字を替える一番の目的はこの会議の決定の第一項に見える「世界文化にカルムイク人民を一番早く近づける目標を達成するには、ザヤ・パンディタ・アルファベットが古くなり過ぎていることを認め、カルムイク語にロシア・アルファベットを用いることとする」[P113/1/33/28] ことであった。^{iv}

さらに同年 1 月 12 日には上記の会議決定の第三項で発足したカルヴィン、ハグリシェフ、コシエフ、トリシカエフそしてオチロフによって構成されるカルムイク文字改革委員会の

会議においてカルムイク語の表記のためにキリル文字にない6つの音素を表記する文字が決まる。(詳しくは表4-1を参照)

この決定で目を引くのは、新しく採用するキリル文字の表記を「転写」(транскрипция)としたことである。

ノムト・オチロフの発表の要約として議事録に載せられているものに「この報告の目的は、ザヤ・パンディタ・アルファベットが何世紀もの間、(文字を)より精巧なものにし、進化しなかったのが古くなり、ロシア・アルファベットの転写をいままでずっと使ってきたカルムイクの知識人についてはいうまでもなく、教養のあるカルムイク人の人々の間には(その文字が占めるべき)場所はない、今もない」[P113/1/33/28]とある。知識人が長らく、非公式にキリル文字を転写的に使ってきたので「転写」としたとも考えられる。が、この「転写」という名称はラテン文字化が行われる前の最後の会議となる1928年の会議にいたるまで使われ続ける。

1月6日の会議決定の第2項に「それと同時に、カルムイクの昔の生活形態、風俗、法律などの研究のために過去にカルムイク人民が書いた文献との結びつきを断つことを望まぬので、調査研究活動のためにザヤ・パンディタ・アルファベットを保つことが望ましいことを記しておく」[P113/1/33/28]とある。「封建主義の遺物」として後に非難されることになるトド文字は、この時期にはまだ「遺産」として考えられていたのである。

また、この転写文字のロシア共産党カルムイク州委員会ビュローによる正式な承認は5月9日であり、決定から四ヶ月が過ぎていた[КГА ПАКО 1/1/49/15]。州執行委員会の決定は10月24日でありさらに遅かった。承認の要請がきているのにも関わらず、この4ヶ月の空白が存在することなどは、強く反対する勢力の存在を示していたようにも考えられる。

1925年5月14日、ケケエフを議長として行われた執行委員会幹部会の11番目の議題とその決定は反対勢力がその時期まで、トド文字を使い続けていたことを示している。

議題：新カルムイク文字(транскрипции)の導入に関して、州政治教育部副部長トリシカエフは新しい文字(транскрипции)で印刷するための活字は既に受領されているが、いくつかの州施設においては今だ「ザヤ・パンディタ文字」を使って出版をし続けており、それが、各方面に不便をもたらしている。この文字の利用は制限されなければならない。

決定：総てカルムイク自治州の部局や施設に対し出版物の印刷の際には新しい文字(транскрипции)を使い、印刷される資料は新しい文字(транскрипции)によって書かれたものを提出することを命じる。[P3/2/660/83ab]

以上のことから、「転写」は日本語の仮名が本来意味した本字(日本語の場合、漢字)に対して使われる意味—「本字」であるトド文字に対する「仮名」としてのキリル文字—と解釈することは可能かとも考える。反対勢力に対し、キリル文字の導入はトド文字の存在を弱める意味はないという方便だったと考えられるということである。

総ての出版物がロシア（キリル）文字化されたのは1926年からだという。1926年1月8日の第一号から週刊紙「ウラーン・ハルムイク」はキリル文字で出されている。

文字体系の変遷とカルムイクの言語政策をめぐる言語学的な問題

さてこうして、始まったキリル文字表記であるが、この後、2回の変更を蒙ることになる。。さらに、その後のラテン文字化、再度のキリル文字化を含めると、実に7つの案があったのであるが、それらを表としてまとめると次のようなものになる。

表 4-1、カルムイク文字変遷表

	æ	ö	ü	ʏ	ɕ	ŋ	tʃ	ts
1924 年案	ä	ö	y	г	ж	ң	-	-
1926 年案	d	v	ю	h	дж	нг	-	-
1928 年案	я	э	ю	г	ж	нг	-	-
1930 年案	ə	ø	y	h	z	ŋ	c	ç
1931 年案	ə	ø	y	h	z	ŋ	ç	c
1938 年案	ä	ö	ÿ	гъ	дж	нъ	-	-
1941 年案	ə	ø	ÿ	h	ж	ң	-	-

現在においては、これらの6つの音素のうち y をどう表すのかについては、それほど大きな問題にはなっていない。

この時期にもゆれていたのは、第二音節以降の短母音が弱化した母音となるため、それを表記するか否か、表記する場合、どう表記するかであった。1924年に決まったアルファベットで書かれた時期には、この弱化母音は ь あるいは ъ で表されていた。1926年案の時には語末に聞こえる弱化母音のみ書くことになっていた。1928年案では全く書かなくなり、以降毎度書くか書かないかが議論されたものの、結局第二音節以降の弱化母音は書かないままであった。なお、第一章で挙げた「土着化」政策により残されたカルムイク語の公文書資料を見ても、人によってかき方が違っており、基準がないように見うけられる。また、長母音の表記も同じ母音を重ねて表記するものと、一つだけ表記するものが并存した。

最終的に1930年代以降は弱化母音は全く表記されなくなる。

原因はフィンランドのモンゴル研究者ラムステッドにあると考えられる。カルムイクのことばを機械にかけて音声分析研究をしたラムステッドの残した表記では、第二音節以降の母音は書かれず、弱化母音がある場所の前の子音の上に小さな○が書かれていた。1924年のキリル文字化提案者であったノムト・オチロフは、20世紀初めにこのラムステッドのカルムイク語の音声的な研究に被験者として音声を提供していた。サンクトペテルブルグ大学で法学を学ぶ学生で会った彼には、ラムステッドの研究を理解する素地があり、ラムステッドの表記が、第二音節以降の短母音を表記しないキリル文字での正書法に影響を与えたと推測される。

81 ページに挙げた 1915 年に出版された改革トド文字を教える教科書の著者はノムト・オチロフとナルマーエフによるであったが、この教科書に補助的に使われたキリル文字による音声表記には第二音節以降の母音は書かれていない。

ノムト・オチロフ自身が表記すべきと考えていたのかどうかは分からないが、改革前の科学的な分析において第二音節以降の弱化母音を書かない表記法が与えた影響は、西欧化、近代化を志向する人々、つまりは、科学を吸収しようとする人々にとって、大きなものであったことは間違いないだろう。

論争の発端

1925 年 11 月モスクワにいるエレンツェノフより一通の手紙がカルムイク自治州執行委員会に送られてくる。彼はこの手紙の中で自分が所属しているソヴィエト連邦諸民族中央出版所附属カルムイク部が、ロシア語に使われるキリル文字以外の補助的に使われる母音や子音が、点を文字に打つことによって成り立つことの不便さにより困難に遭遇していることを訴えている [P3/2/713/112-112ab]。

この手紙に対し執行委員会は 1925 年 12 月 30 日に「上に符号を加えるのは全く不便であるという結論に達し、ロシア共産党州委員会扇動部（アジト・ビュロー）は特別委員会を組織し、適切な新しい文字を（著者注：この後は切り取られており判読不能）。委員会は自らの作業を終えきっていない。この新しい「転写」はすでに市民権を得ており、時と共に新しい転写の不十分さはすべて修正されることになるであろう」と解答している [P3/2/713/115]。

この問題に関してはその後 3 月頃、文字改革をするためのサンプルを作ることをカルムイク印刷所のグロモコフキンに依頼したのに対し、その議論の決着がつくまでは様子見する旨が書かれた返事が公文書として残されている。

1924 年に決められた文字への批判を批判したエレンツェノフの手紙の勢を借りて、1926 年 6 月 17 日の州執行委員会幹部会に提案がなされ、同幹部会会議決定議題 8 において次のような決定がなされる：

議題：

転写、術語、正書法の最終的な作成に関する会議の招集許可に関する州人民教育部の請求

決定：

会議の招集とともに人民教育部は予算を編成し、幹部会の承認をえることを了解する

[P3/2/741/54ab]

さらに、同月 22 日の同会議に出される予算が決まった。[P3/2/741/56ab]

「文字問題」会議

こうして、「文字問題」会議が 1926 年 9 月 3 日から 7 日まで、6 日の中休みに正味四日間、行われることになった。

この会議への参加者は次のような人々であった。

コシエフ	カルムイク自治州教育部部長
カルヴィン	農業専門学校校長
ドルジエフ	師範学校校長
ハグリシェフ	レニングラード現代東洋語大学学生
マンジエフ、H. (ニムゲル?)	州共産党青年同盟ビュローのメンバー
マイヨーロフ、B. Γ.	州共産党青年同盟ビュローのメンバー
アムゴロフ	バガツォロフ・ウルス執行委員会書記
ボスハムジエフ	共産党州委員会
ウトナサノフ	記載無し
ナルマーエフ、Л. Ж	教師
タズギロフ	教師
アントノフ	教師
ボルディリョフ	教師

[P3/2/703/659]

これを見て分かるとおおり、最初のキリル文字化提案者であるノムト・オチロフの名はここにはない。彼は 1930 年代の粛清を経て、1960 年まで生き延びるが、この時期にどのような活動をしていたのかは不明である。また、行われた発表は以下のようなものであった。

- 1、ボスハムジエフ 'カルムイク・アルファベットの改良に関して'
 - 2、ハグリシェフ '正書法の問題'
 - 3、コシエフ '術語'
 - 4、ハグリシェフ 'カルムイクのことば'
- [P3/2/703/659-659ab]

発表はたった 4 つであり、9 月 3 日から 5 日までの間、夕方 5 時頃から始まった。本来の仕事の終わった後に開かれた会議だったのではないかと推測される。

この会議では、エレンツェノフが批判した 1924 年に決定された ä, ü といった本来のキリル文字アルファベットにカルムイク用に加えられた文字の代わりには d, v が採用されることになる。

この会議にはじめて術語の問題が議論された。

コシエフの発表では術語に関しては以下のような提案がなされている。

- 1) カルムイク語の語彙を増加させるため、文章語の言葉を、人々の口語となっており、死

語となっていない限り使う

- 2) 外国語のことばと概念はなるべくカルムイク語に翻訳する
- 3) その外国語のことばが国際的な意味を持っているならば翻訳せず、カルムイク語の正書法に則った形で残す
- 4) ロシア語の省略形 (ソブナルコム、ВЦИК、ОИК、АИК など) はそのままの形で受け入れる
- 5) カルムイク自治州術語委員会を創設し、カルムイク語の辞書をこの委員会によって作製する [P3/2/703/660]

以上の提案は 10 月 1 日に、州執行委員会幹部会会議決定の議題 10 で以上の会議での決定が承認された。

以上の議事録は公文書館資料 P3/2/703 の 659～663 ページに収められているが、この文書を提出する際に、組織委員会が添付した文書 (658 ページ) には組織委員会自体がこの決定に反対であることが述べられている [P3/2/703/658]。この組織委員会の発言の影響力は、はっきりとは分からないが、この後、新たなアルファベットのための活字の注文はなされず、新アルファベット案と旧案との間の論争は続いたようである。そのような停滞状態を解決すべく再度会議が開かれるのは 1927 年 1 月のことであった。

再検討

1927 年 1 月に行われた会議は 1924 年のアルファベット案と 1926 年のアルファベット案のどちらをとるかを審議するものであった。この会議の参加者コシエフの語ることばの中に、1926 年 9 月の会議以降、1927 年 1 月まで何があったのかを知ることができる部分がある。それは次のようなものである。

昨年 1926 年 9 月「転写・正書法・術語会議」は 3 つのラテン文字 v、d、h を新しい文字 (знаки) として採用しました。この会議の決定は州執行委員会幹部会にて承認されました。そののち、州出版局長のグロモコフキン同志に、州執行委員会幹部会の決定によって十分な量のこれらの文字 (の活字) を買うかどうかを尋ねました。

2 日後、グロモコフキン同志は私に、新しい文字 (の活字) を彼が買うことはないといい、なぜなら、カヌコフ同志がこれらの文字 (の活字) を買うことを止めるべきだといったからだといいました。そこで、私はカヌコフ同志の所に行き、これらの文字を買うことを制止したことに関して彼に指示を出したかどうかを尋ねました。カヌコフ同志は「ええ、指示は出しましたよ。指示しました。なぜなら、ラテン・アルファベットから採用した文字は、誰にとっても親しみのあるものではないし、ロシア・アルファベットの別の文字と取り換えた方がいいからです」と答えました。

その後、カヌコフ同志も (モスクワへ) 去り、グロモコフキンも同様に去りました。出版社がこの新しい文字 (の活字) が得られない限りは、新しい文字 (改革) は実行されないのです。私が学校の設備を民族化することに関する発表を州委員会で行ったとき、私はこの問題も同時に取り上げ、この問題を完全に解決することを要請しました。この州委員会ビュローがこの会議

において当（訳注：転写採用再検討）委員会を設置させました。それが故に、同志たちがこの集まりに召集されることになったのです[P3/2/825/97]

これに対するカヌコフの答えは次のようなものであった：

新しい転写文字には、ザヤ・パンディタ文字でカルムイクの文章語を読んできた人々に、そう、それに我々の読者大衆に全く親しみのないラテン・アルファベット起源の文字があります。（これは）現在の我々の大衆が使うことが可能な転写文字を得ることを困難にします。これらのラテン文字を取りやめ、ロシア・アルファベットの転写文字によって我々の大衆に文字を広め慣れさせる方がよいと思う。ということで、私は新しい文字を買うことを止めさせようと考え（ました）、そう、それに、グロモコフキン氏にも、モスクワ（の活字製作所で）は3-4文字の注文は受けませんが、完全なセットの注文は受け付けるといわれていました。[P3/2/825/97ab]

また同席していたマイヨーロフは次のように述べている、

（1926年の）新しい文字が採用された会議で教師たちは、現場からやってきて、点々を付ける文字は文字として非常に不便であると証明しました。州執行委員会幹部会がこの会議の決定を承認しているので、この問題を再検討するのは目的にあっていないと考え、幹部会で承認された文字はそのままに効力を持つとするべきだと考えます。[P3/2/825/97ab]

最後に、コシエフはv、dの変わりにöとяにしようといい、カヌコフは、ラテン文字は別の文字に変えるべきであるといった。議事録には「コシエフ、カヌコフの二人は自らの意見を固辞し続けた」とあるものの、結局最終的にはマイヨーロフの主張が通り、1926年の採用の形のままということできました。

1927年3月17日、州の執行委員会は1926年10月1日に承認したカルムイク転写文字を再度承認する。[P3/2/741/177]

こうして、1926年の会議で決まったアルファベットが採用されることが決定されるが、なおも、抵抗が続いたので、1927年6月中央から文字改革関係文書の提出が中央執行委員会に要請され、文書を送っている。[P3/2/825/92]

同月、ようやく、新アルファベットの活字が注文され[P3/2/825/96]、1926年に決定した案が実行に移されることになるのである。

解決に向けて

問題は解決したかに見えた。しかし、事はそう簡単には納まらなかったようである。さらなる表記の変更に対する抵抗を示す資料は無い。しかし、1927年11月に、この問題を解決するために再度、言語改革、文字改革に関する会議を開くべきという提案がなされていることは、この二回目の決定に不満を持つものがかなりくすぶり続けていたことを示しているように思える。

カルムイク人の中での解決は不可能と考えたからなのか、この第三回目の言語に関する会議の招集には中央から権威ある専門家を招くことになった。

そのような決定を下したのは、このころ盛り上がりを見せていた「土着化」政策を監督する任務を持っていた土着化委員会である。

1927年11月27日に開かれた州政府機関土着化委員会は転写に関する会議の招集を議題として取り上げ次のように決定する。

決定： カルムイク・アルファベットと正書法に関する会議は原則的に必要であると認識し、遅くとも1928年1月1日前までに、議事日程と共に召集すること。

ウラジーミルツォフ教授と彼が発表者として、この会議を召集する時期と参加できる可能性に関して早速連絡するようコシエフ同志に依頼すること [P3/2/752/187]

この決定を受け、カルムイク自治州執行委員会は1927年12月2日にレニングラード科学アカデミーに対して、12月の終わりにアストラハンで召集することになる会議に、ウラジーミルツォフを招聘したいという要望書を送る。 [P3/2/752/184]

当初は12月25日に会議を開くことを予定していたが、当時、ソヴィエトにおけるモンゴル学随一の権威であったウラジーミルツォフに1月の終わりになるまでは時間がないことが分かると、彼を迎えるために2月5日に会議を変更している。

こうして、ウラジーミルツォフを迎え、モスクワから手紙を出して採用された文字の第二案を作るきっかけを作ったエレンツェノフ、1927年の再検討会議において自らのアルファベット案を主張した人民教育部のコシエフ、そして、同会議で改革に反対したカヌコフも参加するよう求められた。こうして、1928年2月5日「カルムイク語転写・正書法会議」が始まる。

「カルムイク語転写・正書法会議」

1928年2月5-8日、「カルムイク語転写・正書法会議」が開かれる。中央からもウラジーミルツォフ、トゥリャクロフが参加し、総勢48人を擁する会議であった。

日程は2月5日にウラジーミルツォフが「モンゴルとオイラト諸部族の言語と文学の現状」という発表をする。つづく、2月6日はモスクワの科学アカデミーから来るゲストの発表となっていたが、到着が遅れたとのことで延長されることになり、2月7日午前11時よりモスクワから到着したトゥリャクロフの発表（題名の記載無し）とコシエフの術語に関する発表、それに午後7時よりカルヴィンによる「ヴォルガのカルムイク人における人民の言語と文章語」という発表があった。最終日、2月8日6時からレニングラード大学の学生であったハグリシェフの正書法に関する発表があり、最後にそれぞれの案に対する決がとられた。

会議の日時を送らせてまで期待されていたウラジーミルツォフの発表「モンゴルとオイラト諸部族の言語と文学の現状」は、現在の文字改革を賞賛するというような言辞が全くなく、逆に、モンゴルで観察されている文章語と口語との融合現象を述べ、革命という時

代を経て、新しい言語が、古いことばとの融合によって生まれていることを指摘する発表であった[P3/2/1144/5-15, P3/2/1144/16-26]。古くなった言語あるいは文字の取り替えではなく、口語と文語の融合による新しい言語の創造にみえるような文語の可能性を語り、モンゴル文語でカルムイクを含めモンゴル諸族全体が通信のやりとりを今現在に至るまでし続けることができた事実、アラビア文字によるアラビア語をつかう域内での通信が広範に行われていることなど挙げたこの発表した内容は、カルムイクでアルファベットをめぐる相争う人の頭に思い切り水をかけるようなものであり、あまり歓迎されるものではなかったようである。

とはいえこの会議では、再度、文字表記の規則の変更が決定される。それは先の表 4-1 のような特殊文字を含むものだったのであるが、1924 年の第一案、1926 年の第二案とは別の案が採択された。なお、コシエフの報告によれば 7 つの案が提案されたが、採択されたものはそのひとつであった。この決定にウラジーミルツォフはどういう役割をしたかに関しては、公文書の記録を見た限りでは分からない。が、彼の発表や発言を見る限り、文字の変更などの議論に積極的に参加したとはどうも思えない。その理由に関しては、第六章で改めてこの会議での彼の発表を取り上げながら検討することにしたい。

さらにこの会議では術語に関する事柄も話し合われる。「国際語」やロシア語から借用するのか、それともモンゴル語において使われ始めている術語を使うのか、カルムイク語独自の術語を作るのかという意見が出されてはいたが、結局結論らしい結論が出ずに終わる。しかし、「国際語」やロシア語からの借用に関しては、カルムイク語の音韻体系に適合させた形で取り入れることが決められており、30 年代になって、ロシア語の綴りそのままを取り入れることを原則にしていた時期とは違う考え方をしていたことが伺える。

余談ではあるが、ここでの発表者の一人であったコシエフの術語に関する発表の中で、既にインテリゲンツィアが使うカルムイク語の中には多くのロシア語が使われ、50%を占めているのではないかという発言があり[P3/2/1144/32]、誇張であるかも知れないが、既にこの時代から、今現在のカルムイク人たちが自分たちの言語に対して感じているような、カルムイクのことばの不純感が存在していたことを感じさせる。

この会議の決定に対する、出版などの対応は早く、既に会議終了一ヶ月後の 3 月初めの「オラーン・ハリマク」紙から決定された文字体系による表記がなされ始めている。

しかし、もうこの時期には既に、ラテン文字化の波が中央からやってきていた。トゥリャクロフの参加がそれであり、彼はこの会議での発表で、新テュルク・アルファベット委員会におけるカルムイク語のラテン文字化を担当することになったと語っている。また、ラテン文字化運動の中心人物の一人であるポリヴァノフからの手紙もこの会議に寄せられ、そこでもラテン文字化を勧めるむきが述べられている。実際、2 年後の 1930 年 1 月にはラテン文字化の採用が決定されることになる。1920 年代続いた議論を解決すべく行われた会議であったので決定に対する反応は素早かったが、もう近くまで来ていた別の新しいラテン文字化運動の波によって一気に洗い流されてゆくのである。

キリル文字化期（1924-1930）のまとめ

1930年以降の歴史は、中央との関係に大きく左右されたものになる。1930年にラテン文字へ移行し、さらにまた、1938年からキリル文字へ移行することになるが、いずれも政治的な配慮との関係は否定できない。

以上で1920年代のカルムイクにおける言語政策の変遷を検討したわけであるが、これらのアルファベットに関してあった批判をまとめておこう。

1924年の文字への批判は、その文字の上に付けられた、ウムラウトであり、それが文字を手書きするとき非常に煩雑である事実を挙げている。

1926年のアルファベットに関してはカヌコフが指摘するとおり、ラテン文字を使用しているという事実とラテン文字での音声と全く違う音価があてられていたことがそれに当たる。

1928年の最終的な解決案は、使われていないキリル文字を別の文字にあてるというものであると同時に、дж、нгをそのまま表し、実はほぼ、ロシア語で表記されるとおりに表記することであった。

とまれ、1920年代に見られた言語改革の最大の目的は、ヨーロッパの文明を吸収すべきかいなか、また吸収すべきとするならばどの様に、といった政治的、イデオロギー的な枠内での議論であった。しかし、1930年代以降と比較するなら、この時期ほぼカルムイク州領域内が中央の縛りを受けず、独立した形で、文字改革を志向できた時期であるということは非常に重要である。ただし、ここで見られた6年ほどの短い期間に3回もの文字体系の取り替えが行われたこと、結局1928年の会議を招集するときに中央の介入を自ら要請しなければ事態の收拾がつかなかったことなどを考えるなら、この問題に関してこの地方に政治的解決の求心力あるいは科学的な権威が確立していなかったことも指摘できそうである。

しかし何よりも重要と思われるのは、この時期に非常にぼやとしていたカルムイク語が文字の形ではっきりと表現され始めたことである。ザヤ・パンディタの作ったトド文字を使って表現されていたのはカルムイクの人々が話していることばではあったかもしれないが、当時のモンゴル人民共和国西部、新疆などにおいても使用されていた伝統のある文字の使用を止め、知識人が非公式に「転写」として「仮名」的に使っていたキリル文字が正式に文字として認められたのである。が、「本字」といわず、この時期「仮名」という名前を通したことによって示されるのは、「仮名」と表現されたカルムイク語がまだ、はっきりと実体化したものとすべての人々に認められず、「古くなってしまった」といいつつもそれまでのトド文字に若干の配慮をせざるをえなかった事実を示しているのではないかと考えられる。しかし、1930年から始まるラテン文字化では、もはやアルファベットは「転写」文字とは呼ばれなくなる。

4-3, ラテン文字化期 (1930~1938)

1929年11月にヴォルガ下流地方の新テュルク・アルファベット会議が行われたとき、

カルムイクでのラテン文字化の進行状況が遅いこと、カルムイク語の新聞「タングチン・ゼンギ」がロシア同化主義者の有利になるよう議論を進めていることに対して批判がなされた[Аитов-гиль(1932) 63]。このことは、カルムイクにおいてラテン文字化に抵抗するものがあつたことを示している。

こうした中央からの圧力を受け、1930年1月7日州執行委員会幹部会において州人民教育部にラテン文字導入のための政策計画を作成するよう依頼することが決定された[Номинханов(1976), 78]。

この決定を受け9月28日よりカルムイク語で出版される雑誌や本は全てラテン文字による出版され始める[Номинханов(1932), 51]。

新しい世代

1930年代の言語政策に特徴的なのは、それまで言語政策に関わってきた世代が次第に姿を消し、革命後の教育の息吹を受けた世代が台頭してきたことである。

このラテン文字化における中心人物となるのが序章において1931年のモスクワの言語学会議での写真を紹介したB.バドマエフである。1905年生まれのB・バドマエフはラテン文字化の始まる1930年1月にはまだ24才であつたはずである。

バガドゥルベト・ウルスのカクナキン村出身の彼は、15歳でアストラハンにできたばかりのカルムイク師範学校に入学し、卒業と同時に地方で学校の教師となった。1925年入党。1930年からサラトフ大学のカルムイク学科に入学し、卒業と共にそこで働き始める。1934-1938年まではアストラハン教育大学のカルムイク語・文学部学部長の地位にあり、1938-1942年までカルムイク教育大学の学長であつた。

1942年にドイツとの戦線に赴き、1944年から1957年まではアルタイや、カザフスタンの様々な教育機関で働いた。

1957年よりスタブロポリ教育大学カルムイク語・文学部、その後、カルムイク大学で指導に当たり、ほとんどの研究者がアカデミー付属の研究所と大学を行き来している中、大学のみで指導を続けた人であつた。1971年に死去、彼の肖像画はカルムイク大学のカルムイク言語・文化学部言語学講座に飾られている。

彼は1931年に『なぜラテン文字化が必要か』という論文を発表し、ラテン文字化をリードしていくことになる。

バドマエフの学んだサラトフ大学にカルムイク学部ができたのは、ちょうど彼が入学した1930年であつた。それまでレニングラード以外でカルムイクを専門に研究する機関がなかったが、サラトフにカルムイク学科にできたことによって、多くのカルムイク人がここで学び活躍するようになる。

サラトフ大学で学んだカルムイク人のうち、その後有名となったものには、文学者コンスタンティン・エレンジェノフ、文学批評家イワン・マツァコフ、教育学者のタシニノフ、

それに、キリル文字の時期にその頭角を顕わす言語学者のドルジ・パブロフなどがいる。以後の展開を見ると、彼らはサラトフ・グループとも呼べるグループを形成したようである。尚、彼らの大学時代に関してはコンスタンティン・エレンジェノフの伝記的小説『火を保て』に描かれている[Эрэнжнэ(1972)]。

この中で特に1912年イク・デルベト・ウルスのケルダタ村に生まれたドルジ・パブロフは、1938年のキリル文字化以降、言語政策の分野で中心となって精力的に活躍するようになる人物である。1957年、カルムイク自治共和国が再建した後も言語政策の中心にいた人物で、一時は自治共和国の文部次官を務めた。その後、カルムイク国立大学の言語学講座の講座長を、上記のバッドマエフが亡くなった後から1994年の死ぬ間際まで務めた。パブロフが著した最初の作品は『半識字者のための学校で教える正書法と練習問題』である。この本は1932年サラトフで出版されたが、何と彼は弱冠20才の若さでこれを書き上げたことになる[Dorz(1932)]。

サラトフ出身者のみならず、この当時の言語政策に関わる人々には、若い世代が目立つ。1928年から1930年代前半にかけて、クルトボホト（「文化の行軍」）あるいはクルトシュトルム（「文化の嵐」）と呼ばれる文化啓蒙活動が、識字運動を中心に行われる。この運動の中心を担ったのは若きコムサモールたちであった[Наверухин(1963), Сборник(1978), 76-77, 80-81, 92-93, 105-106]。サラトフ大学出身の教育学者タシニノフによれば、この運動はサラトフ大学のカルムイク人学生たちによって組織され、1931年3月7日からからアストラハン、スターリングラード、サラトフなどから送られた学生たちを中心に大々的に行われたという[Ташнинов(1969)]。その活動内容は読み書きと基本的な文法、算数、政治教育、農業、獣医学の基礎的な知識の教育と、衛生教育であった。とくに、識字運動に関しては、5月1日から10月1日まで間に39,970人の非識字者、13,350人の半識字者に教育を施したとその成果を強調している。また1936年にも識字運動が再度行われていた。

それにしても、なぜ、サラトフだったのだろうか？

スターリン期ソ連の歴史家たちの運命を描いた作品『岐路に立つ歴史家たち』で土肥は、内戦時に一時レニングラードの歴史学の教師たちが避難場所としてサラトフに居を一時構えたころからレニングラード大学とこのサラトフ大学の結びつきがあったことを記述している[土肥恒之(2000), 48]。レニングラード大学がモンゴル研究の中心地であったことを考えるなら、この地にカルムイク語科ができたことに何らかの影響を及ぼしている可能性もある。

しかし、なによりサラトフはモルドヴァ人、ドイツ人、カザフ人、タタール人、バシキール人といった民族が混在するヴォルガ下流地域の中心都市であった。1928年3月、ヴォルガ下流地方が新しく行政単位として作られ、カルムイク自治州は、ドイツ・ヴォルガ自治共和国とともにその行政単位の管理下におかれることになった。1928年3月16-18日に開かれたヴォルガ下流地域党地方委員会主催の少数民族内での活動に関する第一回地方党会議の決定に並記された地域ごとの人口をあらわした表を見ると、ドイツ・ヴォルガ自治

共和国とカルムイク自治州もその管理下に入っていることがわかる[О работе(1929), 23]。ここから考えれば、上部の行政単位の中心都市であることが、サラトフに学科が作られた大きな要因であると考えられる。また、サラトフには、カルムイクだけでなくタタール師範大学のように特定の民族を対象とした学校もあったのである[Аитов-гиль(1932), 61]。

そして、このサラトフにこういった若い世代の活動を指導するものとしてやってきた人があった。ボリス・パシコフである。

彼は1891年にペンザ州で生まれ、カザンの宗教学校で学んだが、1913年、カザンの宗教アカデミーに行くことを拒み、ウラジオストックにある東洋学大学へ入学し、満州・中国学部と、日本・中国学部で学び始める。同時に1915年から中国語を商業専門学校で、ラテン語を男子ギムナジウムで教え始める。1919年にイルクーツクに移るが、折しも、コルチャク軍が攻撃する最中であり、多くの教員が去ってゆくなか、中国語、日本語、満州語を教える傍ら、後にブリヤート師範大学なる基礎も築いたのだという。その後、1923年に教授としてウラジオストックの極東大学へ戻り、中国語を教えることになった。彼は中国の白話運動に興味を持ち、その方面での著作がある。1926年からは、モスクワに移り、東洋学大学や東洋諸民族・民族文化学術研究所で中国語とモンゴル学入門を教えていたという。

このような複雑な履歴を辿った後に、1930年カルムイク学部創設とともにサラトフ大学に移り、カルムイクのラテン文字化を指導する役目を果たすことになったのである。

彼の著作に関する様々なリストを調べると、目に付くのは中国学関係の論文である。モンゴル語に関してはサラトフに移る以前は二つ(「中国人とその文化のモンゴル起源理論分析」、「言語の音韻体系とのモンゴル語アルファベットの対応段階について」)だけである。白話運動に興味を持っていたことから彼は、中国語のラテン文字化にも参加するが、不思議なことに彼は朝鮮語のラテン文字化を計画する論文も発表している(たとえば[Пашков(1932)])。『革命と文字』誌1932年第3号には、計画の進行状況報告と1933年に実行可能な計画を所定の日時まで報告することを呼びかけるリストが公開されている。ここにおいてパシコフは「カルムイク語における母音の正書法規則の作成」に関して11月5日までに提出するよう求められていた。^{vi}

このような彼が何故、サラトフでカルムイク人たちを指導することになったかの経緯は、はっきりしない。新アルファベット中央執行委員会においてブリヤートはポッペが担当することになっていたし、他のモンゴルを専門とする研究者のなかで「権威」として1928年の会議に呼ばれたはずのウラジーミルツォフは、ラテン文字化に否定的で、非協力的であったことから指名されなかったのかも知れない。なお、ポッペが1934年に発表した「1917-1932年のモンゴル語学に関する文献目録」では、海外の文献と同時にバラードインなどブリヤート人たちが書いた論文まで載っているが、カルムイクはまるで無視されている[Поппе(1934b)]。彼の関心の方向が伺われよう。

なお、パシコフが、サラトフに移ってきた時点でカルムイク語を知っていたかどうかは不明である。イルクーツクでモンゴル人やブリヤート人との交流はあったにせよ、また、

論文を2, 3書いていたにせよ、彼の生誕70周年を祝う記事を見てもそれほどサラトフに
来た時点でカルムイク語に関する高度な知識を持っていたようには思われない
[Концевич(1962)]。しかし、それでも就任一年後の1931年には、それまでの文字改革の中
心にいたコシエフや、次に紹介するノミンハーノフとの共著で学校用の『カルムイク文法』
を著していることになっている。が、カルムイク語で行われた1934年の言語学会議で彼の
発言として残っているのは、ノミンハーノフに対するコメントがカルムイク語であっただ
けで、残りは全てロシア語であった。

さらにもう一人、この時期に現れる重要な人物がいる。

ツェデン=ドルジ・ノミンハーノフ、本名ボリス・ユンズコフである。1898年生まれ、
ドン・カルムイクあるいはブザウと呼ばれる支族の出身である。

彼は1921-1923年代初期にモンゴルに軍事顧問としてロシアから派遣された23名の中の
ひとりであり、「ノミンハーノフ」はその時に付けた綽名からきている。帰国後、彼はレ
ニングラード大学で学んだ。1920年代の言語や文字をめぐる議論に積極的に意見したカヌ
コフ(1933年死去)とは、モンゴルとともに戦った中であるが、1926年の会議、1928年の
会議の参加者にもノミンハーノフの名前はない。彼の名前が登場するのは、1930年、パシ
コフ、コシエフと共著でカルムイク語の正書法の教科書を著してからである。その後、
1931年1月のモスクワでの言語学会議に参加している。サラトフ・グループの面々ほど若
くはないが、当時彼もまだ32歳であった。

前出の1932年にあった進行状況と実行可能な計画を報告することを要求するリストにお
いて彼は4つの部門に対して報告を求められている[Алавердов(1932), 102]。1934年の第四
回言語学会議では、モスクワからの新アルファベット委員会代表として参加している。つ
まり彼が中央とカルムイクとのパイプ役を務めたということになる。

しかし、1930年代後半にはカルムイクにおらず、ウズベキスタンの大学で、新疆からき
たオイラト系モンゴル人たちのための教科書を作成し、「モンゴル語」を教えている。興
味深いのはここでいうモンゴル語の教科書はトド文字で書かれたもので、一般にモンゴル
語といわれて想像するモンゴル文字で書かれたものではなかったことである。1930年代、
新疆に領事館を構え、影響力を行使しようと狙っていたソヴィエトが、新疆からカルムイ
ク人と同系に当たるオイラト系のモンゴル人たちにも影響を与えようとしたことは考えら
れそうなことである。彼のもとで学んだ人の中には後に新疆に帰り、共産党軍の司令官の
一人であったエルジャがいる[Илишкин(1996), 25]。

その後、彼はハカス、カザフスタンの教育機関で働き、カルムイク自治共和国再建後は
アカデミー付属の研究所で1967年になくなるまで働くことになる。

それにしても、ラテン文字化の最中に何故ウズベキスタンに行くことになったのかは、
後に述べるようにサラトフ・グループの人々との意見の対立が原因したのではないかとい
う説が有力であるが、他にもう一つの説がある。噂の域を出ないのであるが、カルムイク
で彼の評判を聞くと、同じくウズベキスタンの大学に赴いた作家・詩人のアクション・ス
セーエフとともに、彼は共産党員であり、スパイ的な役割を担わされたという話が必ずと

いっていいほど出てくる。そういう人物なので、ウズベキスタンの大学において、共産主義教育をするために引き抜かれたのだという説も存在するのである。非常に興味深い問題であるが、カルムイクにおける言語政策の問題と大きく外れるため、別の機会を設けて検討することにした。

モンゴル諸族文字・言語問題会議

カルムイクがラテン文字化を決めた翌年、1931年1月10日-17日、モスクワで行われたモンゴル諸族文字・言語問題会議が行われる。ラテン文字化の進展とともに、ソ連邦全域をひとつのアルファベット体系でまとめる方針が放棄され、チュルク諸語や北方諸言語という形で、民族的あるいは地域的なまとまりで文字とその表記する音素を統一しようとする運動や会議が行われたが、モンゴル諸語についても、諸言語の表記とその内容を統一しようという会議が行われたのである。

この会議にカルムイクからはB.バドマエフ（「カルムイク自治州におけるラテン文字化と統一化について」）、ノミンハーノフ（「カルムイク語の新文章語の正書法について」）、イリシキン（「カルムイクの文章語について」）、マンジエフ（「カルムイク語の術語について」）の四人が発表した。イリシキンは後に初代アカデミー付属の研究所の所長になる言語学者、マンジエフは作家である。いずれも20代から30代前半であり、実績もあまりなく、50代のブリヤートのバラーディンや、40代半ばのウラジーミルツォフ、30代ではあるが十分な実績を持つポッペなどの中ではあまり大きな存在になり得なかったかも知れない。

この会議の中心にあったのは、間違いなくブリヤートとモンゴルの言語建設に関する議論であり、とくにブリヤートの知識人たちはハルハ方言を採用した文章語の作成をもくろんでいた。カルムイク人たちはこの会議に参加してはじめて、そのような議論に巻き込まれ、ブリヤート人たちのモンゴル諸民族を統一しようとする思想の「洗礼」を受けたかも知れない。しかし、後の結果を見てみれば、彼らはこの会議の決定に反発したのである。

この会議でアルファベット、文章語、術語、正書法といったそれぞれの議論においてカルムイクはブリヤートの方針と違うものに対し、修正を要請されている。

アルファベットに関しては、ロシア語におけるцにあたる文字をç、чにあたる文字をcとなっていたのが、ブリヤートやモンゴルと表記と正反対であったのを修正するよう求められ、またhに関してはнに、nに関してもngと書くよう求められている。また、口蓋化した音声にьをあてることになっていたところも、ıと書くように求められたが、それにはノミンハーノフが反対している[Конференция(1932), 70-71]。

文章語に関してはといえば、カルムイクに関してはモンゴル、ブリヤートと違いトルゴート方言が採用される。しかし、ここには非難がましいことばは見えない[Конференция(1932), 72]。

術語に関しては、全ての言語においていかにして新しい語彙を作っていくかの基準が定まっていなかったため、外来語を導入した場合、母音調和や導入する言語の音韻法則に従って書くという原則のみきめられた。ここにも別にカルムイクに関する非難はみら

れない[Конференция(1932), 74-76]。

最大の問題になったのは正書法である。会議では、第二音節以降の弱化母音を母音調和の原則に従って書くことを決めた。前述のとおり、カルムイクでは、1924年から弱化母音を表記しない方針を取っていた。この点に関して、会議ではカルムイク語の正書法の整備は不十分であるとし、モンゴル語の正書法と十分可能な限り統一し、つまりは弱化母音を表記する方向でさらに整備することを要請されたのである[Конференция(1932), 74]。

カルムイク人にとって弱化母音を書かないことは科学的な根拠があり、この要請はカルムイク人たちがよって立つ自分たちの正書法やアルファベットなどの「科学性」を覆すことを要求するもので、到底、受け入れられるようなものではなかった。

1931年5月、モスクワの会議での決定を受け、エリスタで行われた第三回言語学会議では、モスクワ会議での要請が議論される。しかし、結局、さまざま出された要請の内、*с*、*ç*のだけが修正されることになった。弱化母音の表記の問題は、この後何度も議題として上るが、1998年に正書法の改革が行われるまでは表記されないままとなる。こうして、モスクワの会議を経験した後もカルムイクは独自の言語政策の方針をあくまで貫いたのである。

その後、1933年にカルムイクにおいて方言調査が行われ、正書法に関する会議もおこなわれる。そして、1934年3月29日、共産党カルムイク州委員会ビュローの決定により第四回カルムイク言語建設会議が招集されることが決まる[КГА ПАКО 1/2/128/169]。

第四回カルムイク言語建設会議

1934年5月10日、第四回カルムイク語建設会議(Халъmg kel tosxlhna IV-gç konferenc)が開かれる。

この会議には55人が参加した。なお、参加者の中には以前活躍したホニン・コシエフ、М・ハグリシェフの名前も挙がっているが、すでに中心的な存在ではなかったようである。

この会議での発表されたものは次の四つであった。

5月10日 И.マツァコフ 『カルムイクにおける言語建設』

5月11日 ノミンハーノフ 『術語について』

5月13日 В.バドマエフ 『カルムイク語の正書法に関して』

5月15日 В.パシコフ 『カルムイクの文章語について』

会議での発表は1926年の会議同様4つであったが、会議は5月10日から15日まで初日を除き毎日朝夕二セッション行われた。

参加者の一人であり、発表も行ったノミンハーノフは1935年に『諸民族の啓蒙』という雑誌に論文を掲載したが、この会議の後になっても、カルムイク語の言語建設の問題が、何一つ解決しておらず、四回あった言語学会議の成果も何一つ活字になっていないことに苛立っている様子が見られる[Номинханов(1935), 39]。

こういった批判があったからなのか、この会議の資料は1935年4月にカルムイクにおける言語学会議においては唯一、本として出版されたものとなった。以下第四回会議に関して検討していくわけだが、その議論の内容の多くはこの本によっている。場合によっては多少の「編集」や改竄がある可能性はあるが、1935年当時には、この本の編集方針に沿ったような雰囲気があったという判断で検討してゆくことにしたい。この本を編集したのは前出のドルジ・パブロフであり、構成はイワン・マツァコフ、二人ともサラトフ大学で学んだ若い世代であった。なお、マツァコフはこの会議で進行役を務めている。彼はこの時、すでに自治州学術管理局の局長であったようである。1935年、彼らはまだ22,3歳。今なら、大学を出たばかりの年齢の者たちが、経験豊富な人々を差し置いて、指導的な立場に立つのは、普通まず考えられないことであるが、ソヴィエト政権成立後に教育を受けた世代が中心的な位置を占めるのが、その当時のカルムイクにおける現実だったようである。

なお、こうして残された資料は、行われた日時の順番で並べられ、セッション別に載せられている。発表はカルムイク語とロシア語の二言語が載せられ、次に発表に対する質疑応答が載せられているが、質疑応答はカルムイク語でしか残されていない。ノミンハーノフによれば、この発表を除いてこの会議では全てがカルムイク語で行われたのだという[Номинханов(1935), 37]。ふり返ってみるならばカルムイク語の歴史にとって空前絶後の歴史的な会議だったのである。学問的な資料、技術的な資料の言語としてあまり使われないカルムイク語において、この時期のある程度までカルムイク語の正書法に沿ったものではあるものの、独特の言葉遣いや、方言的な音性的特徴が残されたものであり、当時どの程度までカルムイク語で議論が可能だったかなどの知る資料としてもこの会議資料は貴重である。

さて、それではどのような議論が成されたか順に追っていくことにしたい。

5月10日夕刻、開会、イワン・マツァコフの発表があり、党州委員会の代表のことばや届けられた電報が読み上げられた。

5月11日朝、ノミンハーノフの発表が読み上げられた。

10月革命の意義と、正書法、外来語の語尾、単語の省略形といった面から術語の現状を述べた後、次のような提案をする。

- 1) 国名・地名などの固有名詞はロシア語の正書法に準ずるべきである
- 2) Кの音で終わる外来語(Большевик, техник など)の語末はkではなくgで表記する
- 3) 複数形の mud, myd, ud, yd はどんな条件の後で付けられるかをはっきりと決める
- 4) 外来語で語末が後舌母音(a, o, u)で終わる単語の複数形は ud, mud を付ける
- 5) 外来語で語末が前舌母音(, , y)の場合の複数形は yd, myd を付ける
- 6) Kommun, Klass といった子音が二重に出てくる場合には一つ(komun, klas)にする
- 7) 国際的な語尾である。-ist, -izm は無条件にカルムイク語で使うべきである
- 8) ロシア語の語尾-sk, -stvo, -nost, ij, ija をそのまま使うことを許すべきではなく、できるだけ、カルムイク語の語尾に変えるべきである
- 9) Химия биология коллегия など語末が ия で終わるものは ximi, biologi, kollegi などと

書き語末の i は残す

10) 語末が -a で終わる外来語は、語彙の意味を変えずにカルムイク語では a を除くべき

11) 省略形に関してはヴァリエーションの違いを出さないように表記する (例えば ЦК(中央委員会)は Partin CK とかく)

12) ロシア語に、同じ意味の言葉が固有語と国際語の二種類があった場合、国際語を採用する

13) ロシア語の語尾 -ство -ность -ость -ичество などに関しては会議で議論し、導入するかどうかを決める [Хальмг(1935), 29-30]

とし、今後、術語を作るときの基盤となるものとして

- 1) 母語 (カルムイク語) とその諸方言
- 2) ソヴィエト連邦における社会主義建設の過程で作られた、あるいは作られつつある術語
- 3) 国際的に使われている社会・政治、学術・技術用語
- 4) カルムイク語に近い言語 (モンゴル語、ブリヤート語) [Хальмг(1935), 30]

などをもとに作ることを提案している。

特に 1) に関しては、-ç や -br などといった接尾辞を多く使って術語を作っていこうという提案がなされ、4) に関しては、カルムイク大衆がわかるものだけに関して採用することを提案している [Хальмг(1935), 30-31]。

このような発表に対する、参加者の反応は、ほぼ全て否定的なものであった。この議論はその日の一日では終わらず、5月12日、朝夕とも、ノミンハーノフの発表をめぐる議論が続いたのである。11日の朝のセッションでのハグリシェフ、コシエフらの意見はまだ穏健であったが、5月11日の夕方のセッションでは、ドルジ・パブロフが、長々と批判を述べる。ここでの批判を要約すればこのようになる。

- 1) ノミンハーノフの発表は、他の人々が言語建設で行っている実践を考慮せず、文字や正書法に付いて一部の人が書いたものや、様々な文献から翻訳したものに基づいている
- 2) この発表では名詞においてカルムイク語では全く見られないような i でおわるような一連の奇妙なでっち上げられた単語がある
- 3) 生きた母語を作り出す道具 (訳注: 接尾辞) の問題に関して、語尾を ç と br に限定するのは非常に良くない考えである
- 5) カルムイクの方言 (ドゥルブト、トルゴート、ブザウ、オレンブルグ、ウラル方言) に関する言及がない
- 6) ことばをどう正書法的に作り上げていくかの多くの事実は述べられているが、結論、つまり、術語創製の原則があたえられていない [Хальмг(1935), 44-45]

この後 12 日の議論に入るわけだが、結局は收拾がつかない状態となってしまった。パブ

ロフの批判に勇気を得てであろうが。また、術語という論題は、正書法、文章語といった議論と比べれば、一つ一つの単語の問題であり、議論に参加しやすかったことも原因と考えられるが、様々な人が、採用すべき言葉の正誤を自分の方言に引き付けるか、あるいは外来語の導入に関しては個人的な趣味で意見を話し始めてしまった。

こういった錯綜した発言者の批判の中で、注目すべきと思われるのは、ノミンハーノフがモンゴル語を使って発表しているという非難である。バドマ・ピュルベエフは「ノミンハーノフの行った発表にはモンゴル語がたくさんはいつている」といい、K.ボリーエフは「発表には、我々とともにあるカルムイクの人々が話すことば（方言）が一つも入っていない。同志ノミンハーノフは、自分の発表をモンゴル語で行った。これは間違ったことである」といつている[Xaьmg(1935), 54,55]。

彼はカルムイクの主要な二つの支族であるドゥルベトや、トルゴートではなく、ブザウ出身であり、そのことばはカルムイクの諸方言の中でモンゴル語と一番近いといわれている。そのため、彼の話すことばがそう聞こえたのかも知れないと思われるふしもある。

しかし、何より大きいのは、彼が3年もの間モンゴルに住み、モンゴル諸族を鳥瞰的に眺められるレニングラード大学で学んだ後、当時もモスクワに住み、中央から依頼を受けカルムイクの言語政策を担当していることである。モスクワ中央から他のモンゴル諸語との統一への圧力が彼にかかっている可能性もあるが、彼がカルムイク語をどうすべきと考えていたかの一端は、1957年のカルムイク再建後に行われたある会議での彼の発言にも伺える。カルムイク大学のビットケーエフ教授によれば、そこで彼はカルムイクの正書法をモンゴル語のようにすべきであると主張したという。さかのぼってこのころも同じ見解を持っていたとすべきならば、モンゴル語だという非難はそれほど間違いがあるようには思えない。

いずれにせよ、ノミンハーノフへの二日掛けての激しい攻撃は、それほど一貫した考え方のもとにおこなわれたものであるようには思えない。しかし、サラトフ・グループ、とくにパブロフについてはノミンハーノフ自身が、この会議で「パブロフは私をわざと中傷しようとしている」と発言するぐらい明らかな悪意を持った非難を行っていた[Xaьmg(1935), 100]。繰り返すが、発言者の術語を作る原則はこうすべきという意見はどれ一つとして、同じではなかった。唯一統一がとれていたのは、パブロフが発言した後で、発言者全てが、ノミンハーノフの発表を悪いとけなすことだけだった。とくに、この当時20代前半の作家であったG・ダワーエフの「ノミンハーノフの発表は良い発表ではない。この発表で話されたことばは研究者のいう様なことばではない」という発言などは、パブロフの発言がなかったら、なされたかどうかわからない[Xaьmg(1935), 55]。

すでに述べたが、これを最後にノミンハーノフは1935年にはウズベキスタンへ去ってしまう。去ることになった理由がどうであれ、結果的にはサラトフ・グループは自分たちと意見の合わないノミンハーノフを排除することに成功したのである。

これと対象的であったのは5月13日のバドマエフの発表であった。この発表についての議論も2日にわたって行われた。

ここでのバドマエフの発表で述べられる正書法は以前のものとそれほど大きな違いは見られない。どうやら、これまで何度も変更を行ったこともあり、様々なヴァリエーションを持った綴り方を統一するというのが議論の中心であったようである。唯一新しい議論として出てくるのは第一音節にある長母音が短母音化しつつあるので、言語の発展を先取りし、第一音節の長母音を短母音として表記しようという提案のみであった。また、正書法を作るもとなる方言に関する問題も議論となった。そのほか、*kelz bəənə* (話して-いる) という表現において、後者の助動詞を *-zəənə* にして前の動詞に付けて表記する、つまり *kelzəənə* (話している) と表記しようという問題と、またそう表記した場合に、後舌母音の場合は、*sanzene*(考えている)ではなく *sanzana* と母音調和させて表記しようという議論や、*uga* という動詞の否定形を、動詞に直接付ける場合は語幹の母音の前舌、後舌に関わらず *-go* と表記しようという提案に対する議論などが中心に行われた[Xalʼmg(1935), 67-86]。

ここでも、術語の問題と同様、個々人の信条や趣味の見解で言い放たれただけの意見が多く見られ、様々な点について賛成反対が入り乱れたが、ノミンハーノフの時と大きく違うのは、その発表の内容に関して、発言者が批判的であったとしても、それほど激しい個人攻撃を誰もしていないことである。批判をしてもバドマエフは良くやっているという意見を述べてからの発言なのである。このように、サラトフ出身者のバドマエフとノミンハーノフの扱いが対照的であることは、この場の雰囲気がモスクワからたったひとりやってきたノミンハーノフにとってあまり居心地がよいものでなかったのではないかということを感じさせる。

パブロフも「バドマエフ同志は 発表を言語学の基礎に基づいて、素晴らしく、人々にわかるように行った」といっているものの、その後は方言で使われることばや、正書法の規則に関する9つにわたる批判的なコメントを行っている[Xalʼmg(1935), 98-99]。

最終日、パシコフの「カルムイクの文章語」に関する発表があった。このしかし、いかなる理由があったかわからないが、パシコフは発表原稿を編集者に渡さず、本になった『第四回カルムイク言語建設会議』には原稿無しで出版する旨が書かれている[Xalʼmg(1935), 109]。

「この発表における提案は、以前の言語に関する諸会議の決定を繰り返したものであり、同様に、この会議におけるこの発表の前に行われた前の二つの発表に対する決定と同じであります。よって、パシコフ教授は我々の文章語のさらなる発展の方法に関する問題に対して、何も新しい指摘をしておりません。また、この発表の内容に話を移しますと、この文章語に関する発表はカルムイク文学と関わりのないものであるといわなければなりません。よって、教授の発表はむしろ、役所か官僚のための言語についてのアプローチしたものであると言えましょう」というハグリシェフのコメントを聞く限りでは、見当はずれの発表をしたため、原稿を引き上げたのではないかと考えられる[Xalʼmg(1935), 104]。

こういった批判に対しパブロフはパシコフの発表を擁護するコメントを残している。しかし、とはいってもその後のコメントから見ると、やはりパブロフが期待していたのも、文学のために使うべき言語の議論だったようである。つまり、宗教的なことばや、封建的

な慣習にまつわることばを文学においてどう扱うべきかなどの議論であったのである。

こうして最終日、ノミンハーノフの発表に対しては、ロシア語から借用されたことばの正書法に若干の修正が加えられ、バドマエフに関しては二音節以上の単語に関しては第一音節の長母音が保たれ、一音節の単語（例えば to[数]）で、接尾辞が付くときに長母音化するものに対しては、接尾辞が付いても母音を短母音として表記する（つまり、toona ではなく tona[数の]となること）という修正が加えられ、全ての議論に対する決定の採択が成され閉会する。

1934年8月14日、以上の会議の決定は、若干の修正をともなって、決定されることになる。この決定が修正した点はノミンハーノフの発表で改めるべきとされた点であり、結局、ノミンハーノフの提案はいずれも採用されなかったということになる。また、術語を創作するときの接尾辞として -c と -br の他に、-r,-l,-ul など使われることが決まった。また、一音節のことばで、接尾辞が付くと長母音化するものについても会議の決定が覆り、接尾辞が付いたときに短母音ではなく長母音として表記することとなった。

この会議の記録を読み通すことでわかることは、すでにバドマエフ、ノミンハーノフ、パブロフという三者が、三様の意見を持って議論に参加したことであった。ノミンハーノフはあきらかに排除されようとしていた。バドマエフは、個人攻撃をされたわけではないが、良くやっているとほめられつつも、「しかし」と続いてその後は批判的な意見が、ノミンハーノフに対するものと同じように長く述べられた。パブロフは、誰の発表に対しても長い批判的な意見を述べた。すでにこの時期から言語政策を牛耳る存在になっていたとも考えられる。残るパシコフは、彼は確かに指導的な立場にある人物であったが、この三人の人物のように議論をリードしようとはすることはなかった。行った発表も的はずれなものとして退けられた。

ノミンハーノフは一年後にカルムイクを去る。パブロフとパシコフの内、この会議に関する編集を任されたのはパブロフであった。

会議から一年後の1935年、カルムイクはそれまでの自治州という地位から自治共和国へと格上げされることが決まった。その機会に第一回カルムイク自治共和国ソヴィエト代表大会が開かれ、今までの「無知蒙昧」な状態から、ソヴィエト政権によって教育、識字運動、文学、出版など文化建設の分野においていか多くのことが達成され、達成されつつあるかが讃えられた[Материалы(1936), 91-110]。

この会議の後、目立った変更といえば、1937年1月15日にそれまで \mathfrak{z} で表記されていた文字を、 \mathfrak{z} に変える提案があり、2月17日にカルムイク自治共和国中央執行委員会幹部会で提案が承認されたことが挙げられる[Павлов(2000) 146 ; КГА РЗ/2/2254/69]。何故この時期になって文字の変更が行われたのかはわからないが、文字が変わることは、言語政策の中心となる人物が交替したことを意味しているようにも解釈できる。

ラテン文字化については1936年パシコフ教授が「カルムイクにおける言語建設」という論文を発表し、「成功裏」に終わったことになっている[Пашков(1936)]。

しかし、後世に、ラテン文字のことを振り返り、ノミンハーノフは一言「ラテン文字化は後の言語政策に悪影響をもたらした」と語ったと伝えられる[Илишкин(1973)]。

上記のようないきさつから考えれば彼がこう書き残したのは、サラトフ・グループが結束し、彼を排除したことが原因であったかも知れない。文字に関する議論は ~~z~~を除いてほぼ1931年で解決したものの、語彙や文法に関する議論において、参加した多くの人が様々なことをいい、收拾がつかないほどにまで混乱した。その原因は1920年代の議論同様、他を圧倒するほどの権威を持った人がいなかったことにあると思われる。何より、語彙や文法そして、新たなる語彙の創出と国際的な語彙の扱いに関してなどにおいては1934年の議論を見るかぎりでは、参加者それぞれが自分達の使っている方言であるいは自分達の趣味にひきつけてこうすべきという主張があるばかりで基本的には何も決まらなかったからである。

また前の世代を引き継ぐことなく、新しく言語建設の議論が始まったことも、デメリットであったはずである。先頭に立ったパシコフ、この時代から本格的に参加したノミンハーノフ、そしてサラトフ大学世代の人々は1920年代の言語建設には全く参加しなかった。この世代の中で比較的全世代を知っていそうなノミンハーノフでさえ、会議の資料が出版されていないことに腹を立てており、1920年代の議論をどれだけ把握していたかにも疑問が残るからである。

このような議論を残したままラテン文字化は1937年に終わることになる。

4-4, 再度のキリル文字化(1938~)

1937年12月30日、パシコフがラテン文字化による言語建設が成功裏に終わったと書いたおよそ一年後、共産党カルムイク州委員会の決定によってラテン文字を廃棄し、キリル文字を推進していく方針が採られる[КГА ПАКО1/3/42/35]。

もうすでにこの頃には以前のキリル文字化の時中心にいたコシエフやハグリシェフは肅清されており、この任務は新しい人が担うことになる。

1938年3月10日、州委員会はキリル文字をカルムイク語の文字として導入することを承認し、同月13日に新しいアルファベットの計画を承認した[КГА ПАКО1/3/102/15; КГА ПАКО1/3/106/11]。なお、この日州委員会で、カルムイク自治共和国領内にあるドイツ人学校とエストニア人学校の廃止と、ロシア語の義務化も同時に承認されていることは当時の雰囲気象徴する出来事であろう。さらに同月ソヴィエト科学アカデミー言語・文字研究所において、ドルジ・パブロフがこの計画について発表し承認された[Павлов(2000), 148]。1938年7月31日正式に「カルムイクの文章語がラテン文字からロシア・アルファベットに移行することに関して」が承認され、キリル文字化が開始される。こうして、キリル文字化に際して、バドマエフは言語政策の舞台を去り、パブロフが指導者となることが明確になったのである。

しかし、カルムイクの言語政策に関する議論は、これで話が終わらなかった。

というのも誰が作成者であるかが特定できないが、1941年1月15日にカルムイク自治

共和国人民委員会議の請願により、2月19日、ソ連邦教育人民委員部が独自の布告によって別のキリル文字アルファベットの採用を決定するからである[КГА P131/1/910/10-11]。

こうして二つの文字案が成立してしまっただが、この併存状態の解決は1959年を待たねばならなかった。

それまでの経過をたどれば次のようになる。

1941年、ドイツ軍によるソ連侵攻が始まり、間もなくカルムイクも占領されることになる。ドイツ軍が撤退した後の1943年12月28日、突然、「敵軍に協力した罪」により、自治共和国が解消され、カルムイク人たちはシベリアや中央アジア、さらに第二次世界大戦後はサハリンに至るまで様々なところへ強制的に移住させられることになる。

こうして強制移住させられた民族がソヴィエト大辞典からも民族名が消されたことは良く知られているが、当然、彼らの言語による出版はこの時期存在しなかった。

1957年、自治共和国の再建が決まり、続々とカルムイク人たちが帰還する。

この時、カルムイク語による出版が再開されるが、モスクワ・レニングラードとカルムイクでは、別々の文字体系で綴られた本が出版されることになったのである。この混乱を收拾する会議は1959年に開かれ、中央で決定されたアルファベット案が採用されることが決まり、パブロフが亡くなるまでは、基本的に変わることはなかった。

はたして、この二つの文字体系の混乱はどうして起こったのか？

ヒントとなりそうなものは1939年に開かれた第五回の言語学会議にありそうである。

残念ながら、文書館に残るこの会議の記録は戦争で失われてしまった。が、個人に奇跡的に残されたレジュメが発見され、1973年に公刊された[Павлов(1973a); Санжеев(1973)]。

このレジュメに付けられた解説によれば、この第五回会議は1939年6月3日から5日まで次のような発表者で行われたという。

Б・К・パシコフ	「単純活用形の分類」
Г・Д・サンジェーエフ	「句読点の問題」
Д・А・パブロフ	「借用可能な語彙の文法的な作成方法」
И・К・イリシキン	「カルムイク語の語彙」

残っていたのはこの内、サンジェーエフとパブロフのものだけであった。

内容的には、これといって新しいことはないが、モスクワ大学にいたブリヤート人サンジェーエフがこの会議に参加していることが、非常に奇異に見える。

というのも、ノミンハーノフが去り、パシコフも1934年にはアストラハンに移り、さらには1935年にモスクワの民族学術研究大学へ移り、カルムイク人たちの指導をつづけたものの、1937年にはモスクワの東洋学大学で中国語を再び教え初め、次第に中国語や満州語に仕事移っていった。こういった中で、中央とのパイプを考えるなら、1931年からモスクワの東洋学大学モンゴル学部学部長の席にあったサンジェーエフが、その代わりを務めたことはあり得そうなことだからである。「句読点の問題」を見る限り、全くアルファベットの問題には触れられていないし、句読点の問題がそれほど、カルムイク語において重要とは思えないが、1938年に行われたブリヤート語のキリル文字化には彼の案が採用され、

1940年に『カルムイク語文法』を出版していることは注目に値する[Санжеев(1940)]。1941年に採用された案が表記する音素の数や正書法の原則までは動かさなかったとしても、ブリヤート語のアルファベット案に近づいたものであることは、それまでの案と比較すれば明確である。発表自体はアルファベットと関係なかったが、別の発表を聞いた上でのサンジェエフの発言や、会議に参加した人々の議論の中に様々なヒントが残されている可能性があったことを考えると、文書が失われたのは返す返す残念である。

戦争によって資料の多くが失われている以上、恐らくこれ以上の推測は無理である。また、残っている可能性のあるモスクワやレニングラードの膨大な資料から探すことになる」とすると、この問題をこの先へ進めるにはさらに時間が必要となるだろう。ひとまずここでは以上のような推測だけを提示することにして終わることにしたい。

1924年から始められたキリル文字の使用を廃し、ラテン文字へ、そしてキリル文字へと再度の文字の変更を行った1930年代は新しい世代が、それまでの世代に取って代わった時期であった。

新しい世代は特にサラトフに新しくできたカルムイク語科を中心に形成され、ブリヤート人たちを中心とする中央からの統一の動きに抵抗し、さらに、中央から派遣されたノミンハーノフも排除した。

続く1938年のキリル文字化の時期になると、サラトフ・グループの中でリーダーが変わることになる。それまで中心にいたバドマエフではなく、パプロフがそれに取って代わる形で開始されるのである。しかし、言語政策への中央の介入は終わらず、1941年には別のアルファベット案ができる。直後に独ソ戦が開始され、キリル文字のアルファベットは二案が並列したまま、1943年自治共和国が解消、シベリアへの強制移住の時期を経て1959年まで続くのである。

こうして検討してきた1920年から1940年代の初めに至るまで戦わされた言語建設に関する議論は、1990年代以降再び、またもや以前にあった議論をふまえずに議論されることになるが、これは本研究の域外となる。また、別の機会を設けて検討することにした。

ロシア領内に住むモンゴル系民族であるブリヤートとカルムイクの言語政策をそれぞれ第三章と第四章で検討してきたが、続く第五章では、1921年に独立しソ連邦とは別の国家を形成していたモンゴル人民共和国における1920-1940年代の議論を検討することにした。

ⁱ なお、1741年頃に出されたドンドク・ダシ・ハーンの法律は旗下のカルムイク人に向かい全員が「モンゴル文字」を学ぶようにという命令を残していると言うが、ここで言うモンゴル文字とはトド文字のことであった。

ここから面白い推論が導き出される。というのも言語学大事典には「トド文字は、カルムイク文字とも呼ばれているが、いずれも正式な名前ではない」と述べられているか

らである。正式な名前でないとしたら本当はどう呼ばれていたのか。首領であるドンドク・ダシ・ハーンが「モンゴル文字」と呼んでいたことから考えると一般的にも「モンゴル文字」と呼んでいた可能性も高い。トドとは「ハッキリとした」とか「明確な」という意味があるが、一方、現在モンゴル文字とよばれる文字はカルムイクにおいてはホダム文字と呼ばれている。ホダムがとは「広い」とか「幅広い」という意味であるといわれる。いずれにせよ推論の域を出ないが、この「明確な文字」と「広く使われている文字」という二つの文字体系をモンゴル文字の下位概念とすれば、その名付けの由来と、自分達の独自性を意識し「オイラト文字」と呼ばず、「トド文字」と呼んだ背景が納得ゆくかも知れない。

ii 1 筆者はこのカルヴィン論文を現在においても発見していない。

iii 1 なお、人文科学研究所のアレクセーエヴァ女史からは、この時期にラテン文字化を考える人たちもいたという貴重な情報を得たが、今のところそれを確認するものは何も出てきていない。

iv 1 ここで、非常に興味をそそるのは、圧倒的賛成多数で可決されたように見えたこの会議での決を、もし、学生を除いた数で採っていたら、果たして比率はどのくらいになっていたかということである。が、そのことを記録するものがない以上、ここではこれ以上の分析ができないのは残念である。

v ナジル・チュリャクロビッチ・チュウリャクロフ (1893-1937) はカザフの革命家・学者である。1918年から党员であった彼はソヴィエト政権の最初の年から中央アジアでトゥルケスタン共産党中央委員会議長、トゥルケスタン中央執行委員会代表といった重職に就き、後に、外交関係の仕事に移っていった。同時に彼は積極的に言語建設に参加した。バイトゥルスノフ (彼も粛清されている) と共に彼は、最初のカザフ語のアルファベットを作成し、そのアルファベットはヤコブレフの古典的な著作である『アルファベット作成の数学的な公式』において高い評価を受けている[Яковлев(1928)]。20年代、彼はモスクワの東洋諸民族中央出版社の指揮を執っている。1936年、東洋諸民族言語・文字大学に政治的な仕事を捨てすっかり移ったのだが、このような行動が彼を救うことはなく、間もなく捕らえられ、1937年10月3日に銃殺された。

vi が、同時に彼は、リストで、「朝鮮語についての雑誌に寄稿すべき論文」と「朝鮮文字の問題の研究に関する学術研究機関の活動」について10月1日までに報告することになっていた。また、余談になるが、朝鮮語に関して求められていたのはこの二つだけであるので、この時期、朝鮮語のラテン文字化をパシコフが仕切っていたという見方もできないことはない[Алавердов(1932), 102-103]。